

静岡県観光活性化センター（仮称）

設立基本構想



TESS

はじめに

静岡県の基幹産業である観光を支える伊豆地域は首都圏住民の宿泊観光目的地として依然第1位の座を保持していますが、他県観光地との差は年々小さくなっています。特に顕著な傾向としては、近隣の箱根のみならず南東北や上信越等遠隔地の追い上げが示す通り競合地域が拡大し、さらには平成7年に1,500万人を突破した海外旅行者の増加は、新たに海外観光地をも視野に入れた国際競合の時代に入ったことを示しています。

それを裏づけるかのように、平成7年度事業で行った伊豆地域20市町村と各観光協会を対象にした伊豆地域観光活性化方策調査によれば、飲食・土産物・観光レクリエーション等観光業界の全業種で売上下降が報告されたほか、観光地としての個性化の不十分、後継者の不足、観光と他産業との連携の弱さ、観光客とのコミュニケーション努力の不足等さまざまな問題点が指摘されています。

問題に気づきながらも解決の方途が見出せないというのが実情と思われます。

サンフロント21懇話会は伊豆地域を含む静岡県東部地域観光の現状を憂慮し、課題解決のリーディング機能を果たすとともに、全体的長期的視野に立って静岡県東部地域観光の活性化に取り組んでいく機関の設置が必須との結論に達し、本構想のとりまとめを推進いたしました。

観光産業への貢献と事業性の双方から事業フレームを検討した結果、①観光情報サービス事業、②会員制保養施設幹旋事業、③コンサルティング事業の3事業を基軸とする新事業会社を設立することを提案しています。

旺盛な行動力をもった観光専門のシンクタンクとして2000年の温泉博に照準を定めて事業をスタートし、将来的には第2東名開通および静岡空港開設を視野に入れつつ、全県規模への活動拡大を考えております。

平成8年12月には本書とともに静岡県観光活性化センター（仮称）の設置要望書を石川嘉延県知事、渡辺新作県議会議長に提出し、また三島市からも県およびサンフロント21懇話会へ誘致の要望書が提出されるなど設置実現へ向け着実に歩みを進めております。

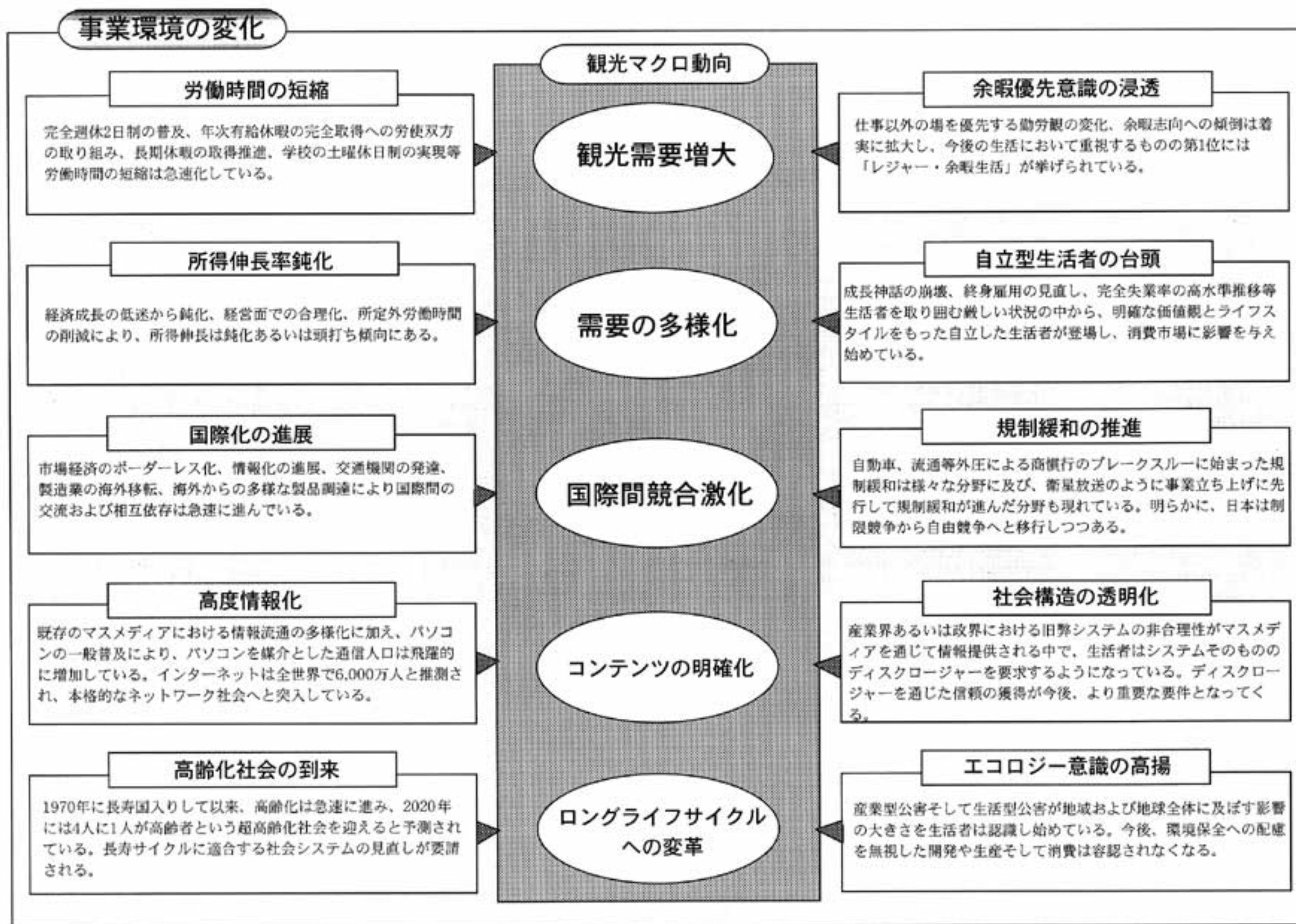
皆様からも是非とも活発なご意見を賜りたいと存じます。

INDEX

1.事業環境の変化と観光の現況	
1.事業環境の変化と観光マクロ動向	2
2.観光マクロ動向	3
2.静岡県東部地域観光の現状と課題	
1.アクセス面の課題	
①アクセスの現況	5
②アクセス整備試案	6
2.観光需要	
①観光入込客数推移	7
②温泉旅館宿泊客数推移	9
③温泉旅館売上高推移	10
④観光目的	11
⑤観光行動	12
⑥客層・利用交通機関推移	13
3.観光産業の現況	
①宿泊施設	14
②交通	16
③飲食・土産品	18
④観光レジャー施設	19
4.課題の整理	20
3.課題解決へのアプローチ	
1.課題解決へのアプローチ	22
2.事業フレーム	23
3.企業理念とステップアップシナリオ	24
4.新規事業〈会員制保養施設幹旋事業〉イメージ	25
5.観光情報サービス事業イメージ	26
4.事業化推進のステップと作業の進め方	
1.事業化推進のステップと作業の進め方	28
2.フィージビリティスタディのステップ	29

1.事業環境の変化と観光の現況

1. 事業環境の変化と観光マクロ動向



2.観光マクロ動向

観光需要増大

労働時間の短縮による自由時間の増加そして余暇・レジャーに対する比重の増大により、観光需要は確実に増えていく。ただし、成長期から成熟期へと移行した経済・社会環境の中で、生活者の意識はゆとりや生きがいといった精神的価値へとシフトし、ライフスタイルそのものの変化をもたらしている。したがって従来型の対応策を踏襲するだけでは事業機会を捉えることはできず、需要増大の中身を洞察することが重要である。特に、休暇取得の自由度が高くなることは、観光時期の分散化を促していくことから、余暇充実のデスティネーション（目的地）にふさわしい独自の魅力づくりが必須になる。

需要の多様化

宿泊観光旅行の目的としては、1960年代に5割以上を占め、その後下降を続けながらも1位の座を保持してきた「慰安旅行」にかわって「自然・名所・スポーツなどの見物や行楽」が平成に入って第1位になった。これは、1泊2食宴会型観光の終焉を意味しており、休暇取得の分散および余暇消費の多様化の中で、新しい観光価値が求められていることを示している。様々なニーズをもった個人・家族・小グループの需要に対応できる新しいシステム（EX.体験型観光、B&B、長期旅行型観光、平日日帰りツアーetc.）および地域の特色ある観光素材を活かしたソフトおよびハード両面の整備が急がれる。

国際間競争激化

近年の円高傾向を背景に、旅行の質を落とさずに円換算での費用が縮小したことから、海外旅行に割安感が生まれ、海外旅行客の増加率は国内旅行客の増加率を大きく上回っている。総理府広報室の世論調査（6年10月）では、国内旅行に対する不満では、旅行費用が高いことが大きな割合を占めており、旅行需要の波動にきめ細かく対応した多様な価格・サービス体系を提供できるシステムの構築が急務である。中でも、低価格化はキーポイントになると思われる。

コンテンツの明確化

氾濫する情報の中で、情報選別力を身に付けつつある生活者はディテール差別化レベルの情報提供では反応しなくなった。そこ（観光地）へ行って、消費活動を行う必然性を納得させられなければ現在の生活者は動かない。なぜ来て欲しいのか、曖昧さを排除した独自のメッセージを伝達できなければ取り残されることは明らかである。PRおよびメディアの見直しも必要であるが、そもそもコンテンツ（内容）のない素材の上に明確で独自の魅力をもったメッセージは成立しようがない。観光地そのものがこうありたい、これを売り物にしたいという明確なヴィジョンをもつことから始めなければならない。

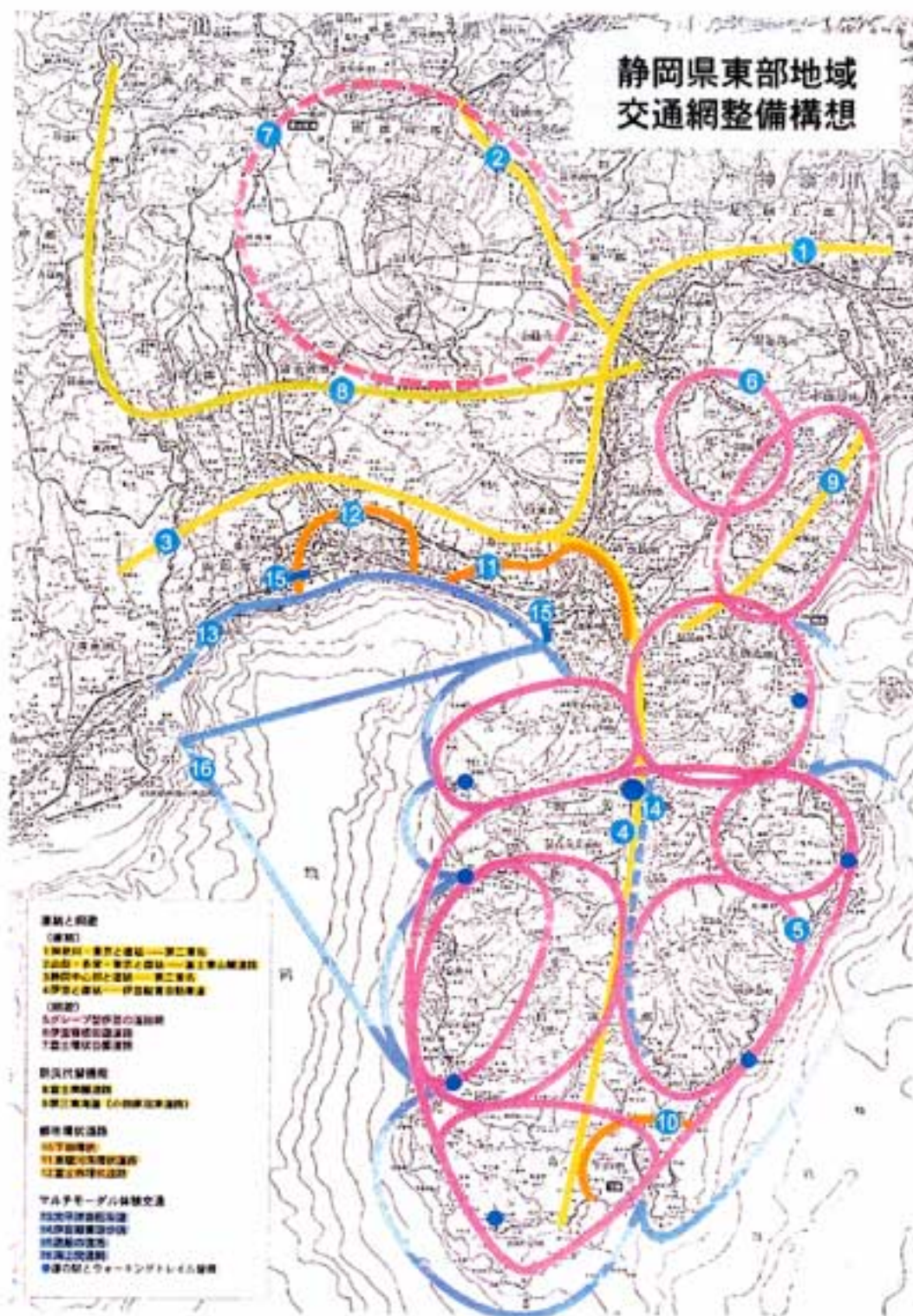
ロングライフサイクルへの変革

高齢者は、経済的ゆとり、自由時間の多さに加え、旅行・健康・趣味・生きがい志向等観光需要の増加に結びつく条件を最も満たしており、今後の観光市場の主役にもなりうる顧客層である。ただし、体力面での下降は避けられないため、施設面および交通面での不安を解消する配慮が必要であり、思いやりとやさしさによる生きがい提供がキーになる。長いサイクルの中で事業を捉えていく時に必要なのは、顧客および地域と共に生きていく「共生の理念」であり、短絡的な開発により自らの環境を損なうことは避けなければならない。

2.静岡県東部地域観光の現状と課題



- 富士箱根伊豆国立公園地域は、首都圏近郊の観光地として高いポテンシャルをもつため観光目的の流入交通が多く、夏期（特に8月）のピーク時には他時期および平日の2倍を超える交通量を記録する幹線道路も現れる。
- 主要因としては以下の3点が挙げられる。
 - ①通過交通と域内交通の未分化
業務用と観光用の2つの性格を兼ねた幹線道路が多いため、域内交通へ観光交通が恒常的に混入している。
 - ②レジャーシーズンには飽和状態の間道
ピークシーズン時は、観光幹線道路混雑回避のため、県道・市町村道にも観光交通が混入する。
 - ③道路整備の遅れ
幅員狭小、歩車道未分離、信号交差点等による道路容量の低下。
- さらに、幹線道路における異常気象時の事前通行規制区間が存在し、また補助幹線道路においても災害危険個所が見られるため、安全面・確実性においても不安を抱えている。
- また、第二東名開通、静岡空港開設に向けたビッグプロジェクトが同時進行しており、実現以降の観光マーケットの拡大を視野に入れた交通網整備の検討も緊急課題である。



- 前頁において列挙したように、さまざまなアクセス面での問題を抱える伊豆地区のアクセス改善を行うためには、伊豆・富士地区を中心に静岡県東部地域における抜本的な交通網整備の発想が求められる。
- 静岡県東部地区におけるアクセス整備に関し、以下のような試案提示を行いたい。

①<直結>と<回遊> 道路機能のすみ分けによる混入排除

<直結>

1. 神奈川・東京と直結——第二東名
2. 山梨・多摩・東京と直結——富士東山麓道路
3. 静岡中心部と直結——第二東名
4. 伊豆と直結——伊豆縦貫自動車道

<回遊>

5. グレーブ型伊豆の道路網
6. 伊豆箱根回遊道路
7. 富士環状公園道路

②防災代替機能による災害時の安全性確保

8. 富士南麓道路
9. 第三東海道(小田原沼津道路)

③環状道路の設置による通過交通と地域交通の分離

10. 下田環状
11. 東駿河湾環状道路
12. 富士市環状道路

④移動そのものが伊豆・富士地区ならではの感動体験を提供する、恵まれた自然や歴史を活かしたアクセス整備

13. 太平洋自転車道
14. 伊豆縦貫遊歩道
15. 渡船の復活
16. 海上交通網

観光入込客数の推移

伊豆地区

(単位：千人)

年	観光入込客数		宿泊施設		〈宿泊客数〉		観光施設		季節行楽・行事	
	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数
1985年	69,119		44,265		18,191		15,688		9,165	
1990年	61,193	100.0	29,902	100.0	18,096	100.0	21,558	100.0	9,733	100.0
1991年	63,771	104.2	30,986	103.6	19,935	110.2	22,506	104.4	10,278	105.6
1992年	61,065	99.8	28,676	95.9	18,542	102.5	22,385	103.8	10,004	102.8
1993年	56,746	92.7	26,597	88.9	17,200	95.0	21,454	99.5	8,695	89.3
1994年	58,306	95.3	26,495	88.6	17,299	95.6	21,603	100.2	10,208	104.9

富士地区

(単位：千人)

年	観光入込客数		宿泊施設		〈宿泊客数〉		観光施設		季節行楽・行事	
	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数
1985年	11,111		2,792		849		7,008		1,311	
1990年	12,944	100.0	3,827	100.0	1,304	100.0	7,847	100.0	1,258	100.0
1991年	14,668	113.3	3,575	93.4	1,358	104.2	9,341	119.0	1,752	139.3
1992年	14,979	115.7	3,120	81.5	1,331	102.1	9,646	122.9	2,212	175.8
1993年	13,936	107.7	2,796	73.1	1,200	92.0	8,995	114.6	2,145	170.5
1994年	14,130	109.2	2,528	66.1	1,092	83.8	9,443	120.3	2,159	171.6

(静岡県・観光客入込統計より)

注1：指数は1990年を100とした数値

注2：制度変更により数値の把握方法に変動あり。経年比較は参考数値

注3：観光入込客数＝日帰り客数＋宿泊客数、

日帰り客数＝宿泊施設利用客（宿泊客以外）＋観光施設＋季節行楽・行事

(1989年4月税制改正による免税点変更、1991年7月の免税点引き上げ等)

注4：伊豆地区（沼津・三島含む）

伊豆地区

伊豆地区の観光入込客数は、ここ5年間では1991年をピークとして減少傾向にある。日帰り客の内訳では、観光施設利用客は1991年をピークに減少傾向となり、季節行楽・行事への参加者は1993年を除き横ばいとなっているが、宿泊施設の利用客（宿泊客除く）は大きく落ち込んでいる。宿泊客数は、1991年をピークに1993年、1994年と続けて1990年水準を大きく下回っている。1993年は、群発地震と冷夏が大きく影響した。1994年は、夏のシーズンが好天に恵まれたにもかかわらず、宿泊客数は前年並にとどまった。

富士地区

富士地区の観光入込客数は、ここ5年間では1992年をピークとしているが、伊豆地区とは異なり、1994年においても1990年水準を上回っている。日帰り客は、季節行楽・行事の参加者が1990年に比べて1992年以降は約7割増加し、観光施設利用客も増加している。一方、宿泊施設利用客（宿泊客除く）は減少を続けている。宿泊客数は、1993年、1994年と連続して落ち込んでいる。

2. 観光需要

①観光入込客数推移

観光入込客数の推移（伊豆地区の内訳）

（1）東伊豆

単位：千人

年	観光入込客数		宿泊施設		（宿泊客数）		観光施設		季節行楽・行事	
	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数
1985年	34,832		25,184		10,564		6,623		3,025	
1990年	29,114	100.0	16,526	100.0	10,731	100.0	8,348	100.0	4,240	100.0
1991年	31,113	106.9	17,337	104.9	11,812	110.1	9,291	111.3	4,485	105.8
1992年	29,846	102.5	15,823	95.7	10,727	100.0	9,694	116.1	4,330	102.1
1993年	26,813	92.1	13,943	84.4	9,389	87.5	9,174	109.9	3,696	87.2
1994年	27,492	94.4	13,990	84.7	9,444	88.0	9,495	113.7	4,006	94.5

（2）南伊豆

年	観光入込客数		宿泊施設		（宿泊客数）		観光施設		季節行楽・行事	
	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数
1985年	8,313		4,019		2,088		1,427		2,867	
1990年	7,226	100.0	2,423	100.0	1,854	100.0	2,527	100.0	2,276	100.0
1991年	7,596	105.1	2,764	114.1	2,301	124.1	2,544	100.7	2,288	100.5
1992年	7,391	102.3	2,573	106.2	2,176	117.3	2,396	94.8	2,422	106.4
1993年	6,895	95.4	2,574	106.3	2,226	120.0	2,203	87.2	2,117	93.0
1994年	7,505	103.9	2,695	111.2	2,326	125.4	2,079	82.3	2,731	120.0

（3）西伊豆

年	観光入込客数		宿泊施設		（宿泊客数）		観光施設		季節行楽・行事	
	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数
1985年	6,435		4,210		1,826		1,151		1,074	
1990年	4,887	100.0	2,388	100.0	1,770	100.0	1,666	100.0	833	100.0
1991年	5,108	104.5	2,566	107.4	2,031	114.7	1,734	104.1	808	97.0
1992年	5,195	106.3	2,535	106.2	2,022	114.3	1,986	119.2	673	80.8
1993年	4,966	101.6	2,350	98.4	1,846	104.3	2,086	125.2	530	63.6
1994年	5,155	105.5	2,287	95.7	1,799	101.6	2,145	128.8	723	86.7

（4）中伊豆

年	観光入込客数		宿泊施設		（宿泊客数）		観光施設		季節行楽・行事	
	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数
1985年	12,570		7,297		2,695		4,641		632	
1990年	13,064	100.0	5,655	100.0	2,961	100.0	6,760	100.0	649	100.0
1991年	12,936	99.0	5,615	99.3	3,005	101.5	6,672	98.7	650	100.1
1992年	11,823	90.5	5,008	88.6	2,770	93.5	6,202	91.7	613	94.4
1993年	11,649	89.2	4,838	85.6	2,685	90.7	6,243	92.4	567	87.4
1994年	11,348	86.9	4,785	84.6	2,721	91.9	5,959	88.2	604	93.0

（5）沼津・三島

年	観光入込客数		宿泊施設		（宿泊客数）		観光施設		季節行楽・行事	
	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数	数	指数
1985年	6,968		3,555		1,018		1,846		1,567	
1990年	6,902	100.0	2,910	100.0	780	100.0	2,257	100.0	1,736	100.0
1991年	7,017	101.7	2,704	93.0	786	100.8	2,265	100.4	2,048	118.0
1992年	6,810	98.7	2,736	94.0	848	108.7	2,107	93.4	1,967	113.3
1993年	6,424	93.1	2,891	99.4	1,054	135.0	1,748	77.5	1,785	102.8
1994年	6,807	98.6	2,739	94.1	1,009	129.4	1,924	85.3	2,144	123.5

（静岡県・観光客入込統計より）

注1：指数は1990年を100とした数値

注2：制度変更により数値の把握方法に変動あり。経年比較は参考数値

（1989年4月税制改正による免税点変更、1991年7月の免税点引き上げ等）

- 伊豆の観光入込客数について、1990年以降の地区別の推移は以下の通り。
- ・東伊豆地区は、観光入込客数、宿泊客数ともに減少しており、特に宿泊客数の落ち込みが大きい。
 - ・南伊豆地区は、観光入込客数は微増となっており、宿泊客数も増加している。但し、温泉旅館の宿泊客数は減少している（後述）。
 - ・西伊豆地区は、観光入込客数、宿泊客数ともに微増となっている。
 - ・中伊豆地区では、観光入込客数は大幅減となり、宿泊客数も一割減少した。
 - ・沼津・三島地区は、観光入込客数が減少傾向にある。特に、日帰り客の中で、観光施設利用者の落ち込みが大きい。

2. 観光需要

②温泉旅館宿泊客数推移

温泉旅館の宿泊客数推移

単位：千人

	東伊豆地区			南伊豆地区			西伊豆地区		中伊豆地区		伊豆地区 合計
	熱海市	伊東市	東伊豆地区	下田市	南伊豆地区	西伊豆地区	中伊豆地区	伊豆地区	合計		
1985年	3,353	1,949	7,229	902	1,124	1,024	1,747	11,125			
1986年	3,417	2,011	7,278	1,006	1,246	1,064	1,897	11,485			
1987年	3,403	2,005	7,337	1,012	1,243	1,144	1,853	11,577			
1988年	3,339	1,966	7,243	972	1,203	1,131	1,857	11,433			
1989年	3,264	1,765	6,782	896	1,114	1,081	1,749	10,726			
1990年	3,383	2,033	7,365	1,107	1,329	1,176	1,892	11,762			
1991年	3,331	2,068	7,263	1,089	1,292	1,111	1,899	11,565			
1992年	3,118	2,038	6,924	980	1,192	1,115	1,735	10,966			
1993年	2,764	1,795	6,055	821	998	1,040	1,550	9,642			
1994年	2,801	1,954	6,298	866	1,143	1,129	1,613	10,183			
1995年	2,673	1,730	5,803	784	1,019	959	1,504	9,285			
1996年1月	252	152	527	66	87	84	138	835			
2月	242	150	525	68	86	88	138	837			
3月	243	176	570	78	104	103	163	939			
4月	193	137	443	57	76	85	122	726			
5月	214	154	475	55	73	84	117	749			
6月	206	136	453	51	65	86	104	708			

温泉旅館の宿泊客数について、この10年間の推移を見ると、1990年をピークとして減少傾向にある。
この間、1989年には伊東沖群発地震と海底火山噴火、1993年は群発地震と冷夏の影響を受けている。

地区別の動向は、以下の通り。

- ・東伊豆地区は、1993年以降の落ち込みが大きい。1985から1991年にかけては700万人台で推移していた宿泊客数は、1992から1994年までは600万人台、1995年には500万人台にまで落ち込んでいる。
- ・南伊豆地区は、1990年をピークに減少傾向にある。
- ・西伊豆地区は、ほぼ横ばいで推移してきたが1995年に大きく落ち込んだ。
- ・中伊豆地区は、1993年以降の落ち込みが大きい。

1985年を100とする

単位：%

	東伊豆地区			南伊豆地区			西伊豆地区		中伊豆地区		伊豆地区 合計
	熱海市	伊東市	東伊豆地区	下田市	南伊豆地区	西伊豆地区	中伊豆地区	伊豆地区	合計		
1985年	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0			
1986年	101.9	103.2	100.7	111.5	110.8	104.0	108.6	103.2			
1987年	101.5	102.8	101.5	112.1	110.6	111.7	106.0	104.1			
1988年	99.6	100.9	100.2	107.8	107.0	110.4	106.2	102.8			
1989年	97.3	90.5	93.8	99.3	99.0	105.6	100.1	96.4			
1990年	100.9	104.3	101.9	122.8	118.2	114.9	108.3	105.7			
1991年	99.4	106.1	100.5	120.8	114.9	108.5	108.7	104.0			
1992年	93.0	104.5	95.8	108.7	106.0	108.9	99.3	98.6			
1993年	82.4	92.1	83.8	91.0	88.7	101.5	88.7	86.7			
1994年	83.5	100.3	87.1	95.9	101.6	110.3	92.3	91.5			
1995年	79.7	88.8	80.3	86.9	90.7	93.6	86.1	83.5			
1996年1月	78.3	96.3	84.2	86.7	94.8	130.3	96.1	90.2			
2月	80.6	94.4	84.5	101.2	99.6	120.5	102.0	91.4			
3月	85.2	99.9	89.1	97.5	99.7	119.8	98.8	94.5			
4月	80.3	98.7	84.7	91.1	95.8	121.1	92.3	90.2			
5月	83.3	102.0	88.4	89.7	98.9	118.5	87.6	91.8			
6月	85.5	97.7	86.5	93.0	99.4	106.7	78.9	88.4			

資料：特別地方消費税申告状況（沼津財務事務所、熱海財務事務所、下田財務事務所）

東伊豆地区：熱海市、伊東市、東伊豆町、河津町 南伊豆地区：下田市、南伊豆町

西伊豆地区：松崎町、西伊豆町、賀茂村、土肥町

中伊豆地区：伊豆長岡町、修善寺町、天城湯ヶ島町、大仁町、蓋山町、函南町

注：（1989年4月税制改正、1991年免税点引き上げ）

温泉旅館の売上高推移

単位：百万円

	熱海市	伊東市	東伊豆地区	下田市	南伊豆地区	西伊豆地区	中伊豆地区	伊豆地区 合計
1985年	51,116	28,004	105,172	11,011	13,003	12,795	23,749	154,720
1986年	54,052	30,350	111,972	13,291	15,565	14,103	26,938	168,578
1987年	57,070	31,169	118,487	14,172	16,528	16,332	27,666	179,012
1988年	58,861	31,720	122,410	14,408	16,906	17,160	28,854	185,329
1989年	60,913	30,625	122,423	13,948	16,552	17,906	30,014	186,895
1990年	69,131	37,494	143,628	18,482	21,416	20,656	34,590	220,290
1991年	73,019	41,569	153,332	19,666	22,520	21,829	36,862	234,543
1992年	70,273	41,049	149,859	19,528	22,789	22,790	35,728	231,166
1993年	61,669	35,656	130,369	16,407	19,200	21,005	32,626	203,200
1994年	60,047	36,355	129,025	16,483	20,637	21,221	33,124	204,007
1995年	55,727	32,263	116,984	14,704	18,265	17,842	29,972	183,064
1996年1月	5,717	3,161	11,644	1,324	1,664	1,769	3,003	18,080
2月	4,891	2,751	10,236	1,191	1,475	1,631	2,614	15,955
3月	4,648	3,094	10,589	1,330	1,698	1,845	2,887	17,019
4月	3,873	2,604	8,767	1,036	1,307	1,588	2,276	13,937
5月	4,526	2,901	9,716	1,046	1,305	1,686	2,335	15,041
6月	4,352	2,593	9,305	906	1,129	1,695	2,123	14,251

伊豆地区の温泉旅館の売上高について、この10年の推移を見ると、1986年以降1991年までは一貫して上昇傾向にあったが、1991年を境に減少に転じた。

特に1993年と1995年の落ち込みが大きい。1993年は群発地震と冷夏の影響であり、1995年は、年初の阪神大震災や長引く不況の影響のほか、秋の群発地震の影響をもろに受けたことが直接的な要因となった。

地区別の動向は、以下の通り。

	95/90比較	95/ピーク比較
・東伊豆地区 1991年をピークに減少。	▲18.6%	▲23.7%
・南伊豆地区 1992年をピークに減少。	▲14.7%	▲19.9%
・西伊豆地区 1992年をピークに減少。	▲13.6%	▲21.7%
・中伊豆地区 1991年をピークに減少。	▲13.4%	▲18.7%

1985年を100とする

単位：%

	熱海市	伊東市	東伊豆地区	下田市	南伊豆地区	西伊豆地区	中伊豆地区	伊豆地区 合計
1985年	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1986年	105.7	108.4	106.5	120.7	119.7	110.2	113.4	109.0
1987年	111.6	111.3	112.7	128.7	127.1	127.6	116.5	115.7
1988年	115.2	113.3	116.4	130.9	130.0	134.1	121.5	119.8
1989年	119.2	109.4	116.4	126.7	127.3	139.9	126.4	120.8
1990年	135.2	133.9	136.6	167.9	164.7	161.4	145.6	142.4
1991年	142.8	148.4	145.8	178.6	173.2	170.6	155.2	151.6
1992年	137.5	146.6	142.5	177.3	175.3	178.1	150.4	149.4
1993年	120.6	127.3	124.0	149.0	147.7	164.2	137.4	131.3
1994年	117.5	129.8	122.7	149.7	158.7	165.9	139.5	131.9
1995年	109.0	115.2	111.2	133.5	140.5	139.4	126.2	118.3
1996年1月	106.9	122.6	116.0	152.9	163.4	202.7	139.4	128.4
2月	107.2	123.2	115.6	166.4	168.4	195.2	144.0	128.9
3月	116.3	134.4	125.1	156.7	166.0	192.4	144.2	136.7
4月	107.8	128.3	116.9	145.0	153.3	181.7	131.7	127.3
5月	113.3	143.6	123.1	136.6	148.1	183.7	128.3	130.7
6月	116.5	124.3	119.4	135.1	146.5	167.4	119.0	125.4

資料：特別地方消費税申告状況（沼津財務事務所、熱海財務事務所、下田財務事務所）

東伊豆地区：熱海市、伊東市、東伊豆町、河津町 南伊豆地区：下田市、南伊豆町

西伊豆地区：松崎町、西伊豆町、賀茂村、土肥町

中伊豆地区：伊豆長岡町、修善寺町、天城湯ヶ島町、大仁町、菟山町、函南町

注：（1989年4月税制改正、1991年免税点引き上げ）

(単位:%)

	昭和39年	昭和41年	昭和43年	昭和45年	昭和47年	昭和49年	昭和51年	昭和53年	昭和55年	昭和57年	昭和59年	昭和61年	昭和63年	平成2年	平成4年	平成6年
慰安旅行	60.2	63.5	53.9	39.2	41.1	42.5	31.3	33.2	31.7	28.6	27.2	30.9	25.8	24.0	22.2	20.5
スポーツ・レクリエーション	2.8	4.5	5.5	6.7	4.5	7.5	10.3	9.3	10.9	21.6	21.1	16.4	19.1	21.2	21.3	18.6
自然・名所・スポーツなどの見物や行楽	19.0	14.4	22.4	32.0	34.5	29.4	26.3	28.2	30.0	20.0	20.5	20.1	21.7	21.8	23.6	23.5
神仏詣	4.0	4.6	2.7	3.0	2.7	3.3	4.3	3.8	3.7	3.8	3.4	4.4	3.8	3.0	2.6	1.8
趣味・研究	7.2	5.2	6.5	9.8	4.2	4.0	4.1	5.2	3.7	3.1	5.2	4.0	4.3	2.5	3.4	3.6
温泉に入る・湯治	*	*	*	*	*	*	4.3	2.9	4.5	8.9	10.2	12.3	12.7	12.2	13.2	13.8
避暑・避寒	*	*	*	*	*	*	4.0	4.3	3.0	2.3	2.2	1.8	1.1	1.6	1.6	1.4
避暑・避寒以外の保養・休養	5.2	5.6	6.4	7.3	8.4	7.6	6.8	5.7	6.3	4.0	4.0	3.3	4.0	2.4	2.2	3.2
その他	1.5	2.0	2.6	3.1	3.9	4.9	8.0	7.3	5.3	5.9	5.3	4.9	5.2	8.0	6.5	7.5

資料：(社)日本観光協会「観光の実態と志向」

この30年間の観光目的の変化には大きなものがある。まず、「慰安旅行」が大きく後退したことである。昭和39年には60.2%と観光目的の主流であったものが、49年には42.5%、59年には27.2%、そして平成6年には20.5%へと低下している。また、「趣味・研究」「神仏詣」「避暑・避寒」および「避暑・避寒以外の保養・休養」も減少傾向にある。

一方、これらの旅行目的に代わって、「自然・名所・スポーツなどの見物や行楽」が23.5%とトップになったほか、「スポーツ・レクリエーション」が昭和39年比では最もポイントが増加し18.6%となっている。また、51年以降のデータではあるが、「温泉に入る・湯治」は着実にウエートが高まっている。

(単位:%)

	昭和47年	昭和49年	昭和51年	昭和53年	昭和55年	昭和57年	昭和59年	昭和61年	昭和63年	平成2年	平成4年	平成6年
自然の風景をみる	54.5	54.5	48.9	48.8	49.2	53.9	51.1	51.7	49.6	49.0	45.7	44.8
名所・旧跡をみる	38.0	36.9	38.2	38.5	38.4	34.6	36.1	36.4	35.4	34.1	32.7	30.6
神仏詣	9.2	9.7	12.2	11.7	11.0	9.8	11.4	12.7	11.3	11.3	9.3	7.8
都会見物	6.7	6.3	7.9	6.8	5.6	4.0	4.1	3.7	4.9	4.0	4.1	4.2
動・植物園	2.5	2.9	4.8	5.1	5.0	11.7	12.7	13.2	13.4	19.0	18.7	18.7
温泉浴	27.7	32.4	34.4	31.6	34.7	36.3	37.8	45.5	42.1	43.1	44.2	42.5
遊園地・ヘルスセンター	3.0	3.2	3.0	3.6	3.4	5.2	5.2	5.2	6.8	7.4	8.3	7.9
趣味・研究	—	—	3.3	5.1	3.4	7.4	4.9	3.8	3.6	3.8	5.9	3.8
ドライブ	8.3	6.3	8.8	8.1	9.5	26.1	24.0	22.9	25.4	24.5	25.0	24.3
海水浴	7.9	6.5	9.7	11.8	9.6	9.8	7.7	8.2	6.1	6.4	5.5	4.9
スキー	3.9	4.9	4.5	4.6	5.0	6.7	7.8	5.5	6.3	7.6	9.0	8.4

資料：日本観光協会「観光の実態と志向」

観光目的の変化同様に、旅行先での行動にも大きな変化がみられる。昭和47以降のデータでとらえると、現在でも依然「自然の風景をみる」が44.8%とトップであるが、そのウエイトは昭和47年の54.5%から平成6年には44.8%と、9.7ポイント低下している。また、「名所・旧跡をみる」「神仏詣」「都会見物」も減少傾向にある。

一方、大幅に増加しているのが「ドライブ」で、24.3%と昭和47年比16ポイント増加、また、「温泉浴」も14.8ポイント増加して42.5%と、「自然の風景をみる」に次いでおり、さらに「動・植物園」「遊園地・ヘルスセンター」も増加傾向にある。

なお、最近のスポーツ、アウト・ドア志向の中で、「海水浴」が減少傾向なのに対して、「スキー」をはじめ「ゴルフ」「テニス」「水泳」「キャンプ」等が増加しており、旅行先での行動は多様化の傾向にある。

○客層

(単位:%)

	昭和39年	昭和41年	昭和43年	昭和45年	昭和47年	昭和49年	昭和51年	昭和53年	昭和55年	昭和57年	昭和59年	昭和61年	昭和63年	平成2年	平成4年	平成6年
自分ひとり	5.2	5.3	4.7	7.4	4.7	4.1	4.8	3.4	3.9	2.6	3.0	4.0	3.3	2.5	2.8	2.7
家族	19.7	18.7	18.5	28.7	30.8	26.0	27.8	29.7	24.1	24.2	24.5	26.2	23.9	28.5	27.0	30.2
友人・知人	27.6	24.6	24.4	26.8	28.4	28.1	25.9	24.9	23.9	26.4	32.5	29.3	32.2	31.0	30.9	31.3
家族と友人・知人	*	*	*	*	*	7.5	5.8	8.8	9.4	7.3	11.3	12.3	13.0	12.5	13.4	11.5
職場・学校の団体	—	—	—	—	22.2	—	16.1	19.0	14.8	17.5	17.5	15.7	15.2	15.5	14.6	12.0
旅行会社などの募集旅行	47.5	52.1	52.2	33.5	*	33.6	4.1	2.1	13.2	11.4	*	*	*	*	*	*
地域・宗教・招待などの団体	—	—	—	—	12.1	—	14.0	10.2	7.1	3.6	5.3	7.0	5.7	4.0	6.2	2.9
その他	—	0.3	0.2	3.7	1.9	0.7	1.5	1.9	3.6	7.0	5.9	5.5	6.7	6.0	5.2	9.3

○利用交通機関

(単位:%)

	昭和39年	昭和41年	昭和43年	昭和45年	昭和47年	昭和49年	昭和51年	昭和53年	昭和55年	昭和57年	昭和59年	昭和61年	昭和63年	平成2年	平成4年	平成6年
鉄道	72.8	66.6	59.1	59.5	65.6	60.4	61.7	48.1	45.4	45.0	43.2	36.5	35.0	38.8	32.1	36.6
バス	44.0	44.0	45.8	36.3	40.0	40.2	45.7	36.1	41.6	36.0	41.0	40.5	37.3	36.5	34.8	29.6
自家用車	8.0	10.8	14.1	18.9	26.9	28.7	28.1	37.7	34.3	40.4	37.3	40.6	41.5	40.7	44.0	47.0
営業車	1.7	1.9	3.1	2.5	10.9	11.3	11.6	12.2	12.2	14.1	14.1	13.5	13.0	14.4	13.2	12.7
飛行機	2.1	1.7	1.6	5.3	3.8	3.7	6.8	7.1	7.7	6.3	6.8	6.5	6.7	8.1	9.5	7.9
船舶	10.6	14.3	8.9	8.1	10.6	10.8	8.5	7.1	7.2	7.1	6.9	7.7	9.4	5.9	6.5	5.1
その他	—	—	—	0.4	1.6	1.2	1.5	1.7	2.3	3.9	2.4	3.2	3.8	4.9	3.5	14.6

資料：(社)日本観光協会「観光の実態と志向」

○客層

観光における同行者の種類をみると、調査年次により分類に若干の違いはあるが、「旅行会社などの募集旅行」「職場・学校の団体」「地域・宗教・招待などの団体」といった団体による観光が大幅に減少している。その一方で、「家族」「友人・知人」「家族と友人・知人」といった小グループによる観光が増加し、主流となっている。

○利用交通機関

昭和40年代、圧倒的主流を占めていた「鉄道」「バス」といった大量輸送・団体型の交通機関利用が減少、代わって、モータリゼーションの進展から「自家用車」が大幅に増加し、現在では約半分を占めるまでになっている。また、観光の広域化の進展から飛行機利用も増加が顕著であり、それだけ競合観光地が増加しているといえる。

1. 宿泊施設

(1) 宿泊施設の数及び収容人員

伊豆半島を含む県東部地域における宿泊施設の軒数は、平成7年12月31日現在で4,534軒、宿泊定員172,161人となっている。

業態別の内訳は、軒数では温泉観光旅館が616軒（13.6%）、普通旅館1,210軒（26.7%）、民宿1,850軒（40.8%）、寮・保養所858軒（18.9%）となっており数としては民宿が約4割を占めている。しかし、宿泊定員でみると、温泉観光旅館が76,023人で、全体の44%を占めており、比較的規模が大きい施設が多い。

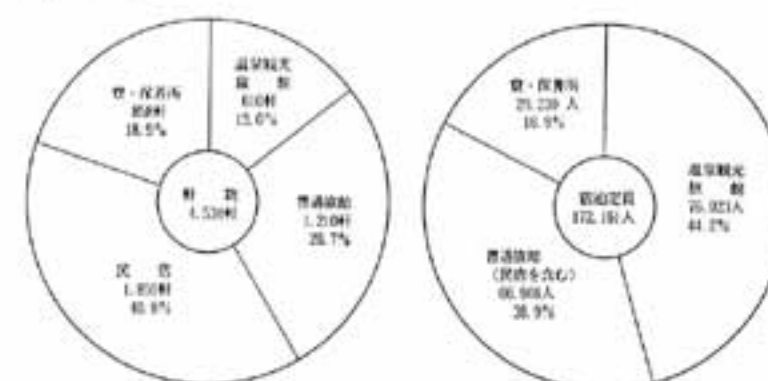
地域的な分布では、温泉観光旅館は熱海・伊東を中心に伊豆半島に集中し、富士山周辺には立地していない。民宿は伊豆半島の中でも東海岸及び西海岸地区に9割が立地している。

宿泊施設のこの5年間の軒数の推移をみると、平成3年の4,758軒から224軒が減少しており、バブル経済崩壊後の景気後退の局面や円高の進行の中での海外旅行との競争などを反映し、特に首都圏の観光客を市場とする伊豆地域の観光の厳しい状況を示している。

このことを一軒当たりの客室・宿泊定員の推移をみると、他の宿泊施設はこの5年間で横ばいであるのに対し、温泉観光旅館は30室から32室、113人から123人へと増加しており、資本金や営業力の弱い中小旅館の廃業が進んでいることが伺われる。

●業態別宿泊施設

平成7年12月31日現在



●一軒当たりの客室・宿泊定員の推移

(平成7年12月31日現在)

区分	温泉観光旅館		普通旅館 (民宿を含む)		寮・保養所	
	客室	宿泊定員	客室	宿泊定員	客室	宿泊定員
平成3年	30室	113人	8室	20人	10室	30人
4	31	117	8	21	10	30
5	31	118	8	21	10	33
6	31	121	8	21	10	33
7	32	123	8	21	10	34

●県東部地域の宿泊施設の推移

(単位：軒、室、人)

区分	温泉観光旅館			普通旅館 (民宿を含む)				寮・保養所			合計		
	軒数	客室	宿泊定員	軒数	内民宿	客室	宿泊定員	軒数	客室	宿泊定員	軒数	客室	宿泊定員
平成3年	663	20,037	74,941	3,228	1,992	26,519	65,417	867	8,797	28,450	4,758	55,353	168,808
平成4年	645	20,025	75,242	3,208	1,924	25,702	67,561	866	8,802	28,632	4,719	54,529	171,435
平成5年	631	19,656	75,071	3,175	1,942	25,435	66,489	865	8,909	29,017	4,671	54,000	170,577
平成6年	625	19,967	76,210	3,099	1,881	25,099	66,674	866	9,000	29,216	4,590	54,066	172,100
平成7年	616	19,872	76,023	3,060	1,850	25,225	66,908	858	8,983	29,230	4,534	54,080	172,161

(注) ・出典：「伊豆半島と富士山周辺－県税から見た伊豆・富士の行楽客の動向」平成7年版
 ・各年12月31日現在

(2) 温泉観光旅館の売上高の推移

平成7年の温泉観光旅館の売上高は全体で約1,830億円、対前年比で10.3%、対平成3年比で21.9%の減少となっており、厳しい経営環境におかれている。

地区別にみると、対平成3年比の減少率が最も大きいのは熱海・伊東地区で23.2%、次いで東海岸地区の22.9%となっている。これに対し、西海岸地区は売り上げ規模そのものは小さいものの18.3%の減少で、比較的健闘しているといえる。

売上高の推移を宿泊人員の推移と比較すると、いずれの地区においても売上高の対前年比減少率は宿泊人員の減少率を上回り、平均宿泊単価は低下しており、観光客の低価格指向を反映し宿泊料金等の引き下げがある程度進んでいることが伺われる。しかし、そうした料金の引き下げにもかかわらず、全体として宿泊客数の増勢につながっていないところに伊豆地域の観光の苦しい状況が示されている。

(3) 観光業界アンケートによる経営動向の評価

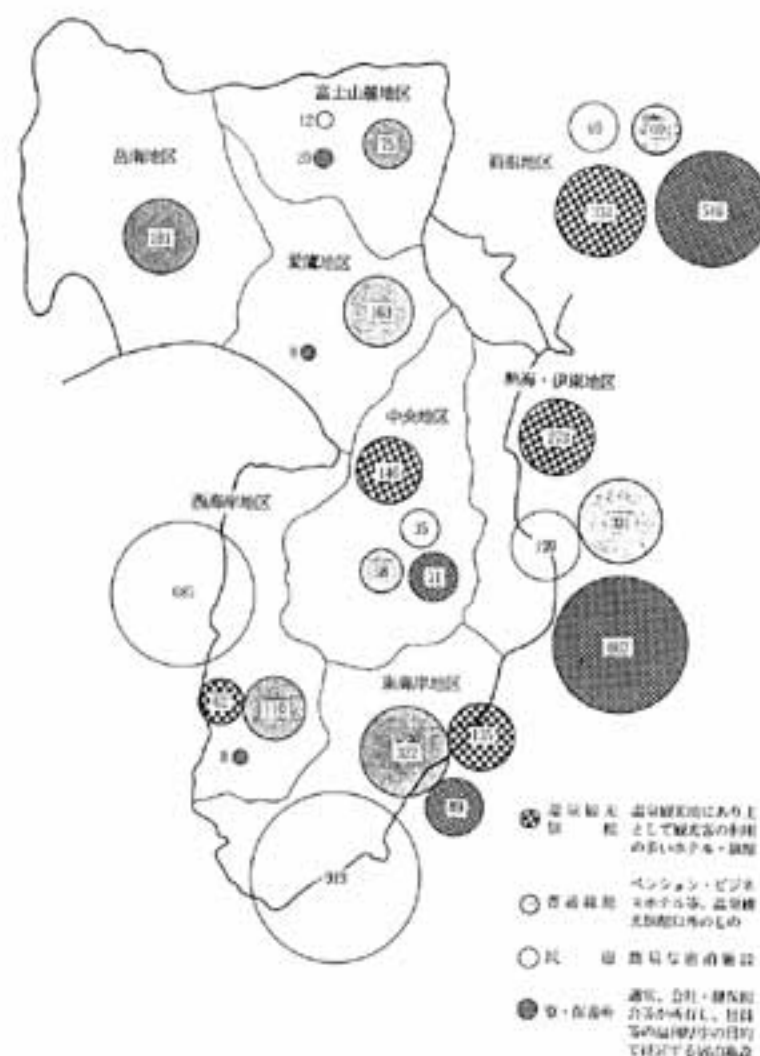
財団法人地方行政システム研究所が平成8年度に行った「伊豆地域観光活性化方策調査」の中の観光業界アンケートによると、宿泊施設業の経営動向に関し、伊豆湯河原と東伊豆町のみ「横道い」で、他は全て(14件)「下降気味」としている。

その要因として、「景気の低迷」(10件)及び「地震の影響」(6件)を挙げる回答が多くなっているが、熱海の伊豆山温泉ではマンションと旅館との競合、網代温泉では海外旅行との競合や長期休暇の増大を要因として指摘しており、もともと1~2泊程度の短期滞在を主体に発展してきた伊豆地域の観光のあり方が問われている。

しかし、こうした観光ニーズの変化や観光行動の多様化に対応して、例えば、客層を従来の団体客から家族・グループ客に絞り、ゆったりとくつろげる質の高いサービスを提供したり、「B&B」方式を採用し合理化と低料金化を図ったり、女性向けのサービスの充実を図るなど、独自の方法で健闘している宿泊施設も増えてきており、今後ますますユーザー(観光客)の志向に合った施設・経営展開が求められるものと考えられる。

●宿泊施設の地区別分布

平成7年12月31日現在



●温泉観光旅館の年次別・地区別売上高

(単位: 億円)

地区	年						
	平成3年	4年	5年	6年	7年	7/3	7/6
合計	234,541,423	231,018,483	203,190,464	204,017,978	183,054,355	78.1	83.7
熱海・伊東地区	114,585,465	111,324,362	97,324,815	96,433,062	87,990,822	76.8	81.3
東海岸地区	61,264,876	61,177,553	52,242,058	53,264,967	47,259,021	77.1	88.7
西海岸地区	21,829,031	22,198,305	21,095,259	21,219,929	17,812,361	81.7	84.1
中央地区	36,861,511	35,728,203	32,625,330	33,124,400	28,971,588	81.3	80.5

3.観光産業の現況

2. 交通

伊豆及び富士地域における観光客の利用交通機関は、平成7年度の静岡県観光流動実態調査報告書によれば、伊豆地域については、首都圏からの鉄道の利便性が高いため、JR線、新幹線、私鉄など鉄道利用率が高く、自家用車の使用は56.2%と県平均の62.3%に比べてやや低い数字となっており、貸切バスや路線・定期観光バスの利用はそれぞれ8.7%、5.9%となっている。

これに対して富士地域は、自家用車の利用が78.3%と極めて高く、鉄道利用は2%前後の低い水準にとどまっている。しかし、貸切バスの利用は平均で12.2%、特に冬では34%と高い比率となっている。これは、富士山麓周辺の観光施設までの移動交通手段がほとんど道路に限定されていることや調査ポイントとなっている観光施設の性格上団体観光が主体となっていること、冬の雪遊びツアーが多いことなどによるものと考えられる。

利用交通機関の推移については、前節の観光需要のところでもふれたように、全国的に鉄道・バスといった大量輸送・団体型の交通機関利用が減少し、自家用車利用が大幅に増加する傾向にあり、伊豆・富士地域においても同様の流れにある。特に、域内での移動交通手段が十分でないため、最初から自家用車に依存する傾向が強いのが特徴である。

別表は、私鉄及びJR主要駅における乗降客数（定期券分を除く）の推移、船舶乗船人員等の推移をみたものであるが、いずれも利用者数は減少している。また、伊豆地域における定期観光バスの利用人員も減少傾向にあることが運行会社に対するヒアリングの中で指摘されている（平成6年度静岡総合研究機構調べ）。さらに、平成8年3月には利用者数の減少から駿河湾カーフェリーの業績悪化を招来し、運航が打ち切られるという状況に追い込まれている。7月から新たに「西伊豆フェリー」として運航が再開されることになったが、依然として厳しい経営環境にあることは否定できない。

いずれにしても、観光客入込数の絶対的減少と自家用車利用の増加が当地域における交通関連産業に大きな影響をもたらす要因となっている。このため、地域全体として観光地の魅力を高め、入込客数そのものを増加する対策はもとよりのこと、鉄道、バス、船舶の利便性や快適性を高める工夫や、これらの交通機関を利用したイベントツアーなどの新しい企画による誘客対策などが求められている。また、とりわけ高齢社会の到来をにらんで、鉄道、バス、船舶の連携を図り、自家用車でなくても地域の中を自由に移動できるシステムの整備が重要な課題になっている。

●地域別・季節別利用交通手段

(%)

地域/季節別	乗降客数	交通手段												
		新幹線	JR線	私鉄	自家用車	少ハイワシ	観光バス・定期	貸切バス	船舶	飛行機	自動二輪車	自転車	その他	調査外
全体	34153	9.5	18.3	7.1	62.3	2.2	5.3	9.4	0.5	0.3	1.3	1.3	0.7	0.3
伊豆地域	4604	11.0	25.9	9.1	59.3	1.9	5.8	7.0	0.6	0.4	0.7	0.5	0.4	0.2
夏	5008	10.8	26.2	9.7	61.6	2.4	5.7	3.8	1.7	0.2	1.2	0.8	0.4	0.2
秋	4508	14.3	25.7	9.4	49.7	3.8	6.3	13.2	0.4	0.9	1.1	0.6	0.4	0.4
冬	4549	8.9	25.2	11.9	54.8	2.9	5.9	11.4	0.6	0.4	0.6	0.8	0.6	0.1
平均	18762	11.2	25.8	10.0	56.2	2.7	5.9	6.7	0.8	0.4	0.9	0.7	0.5	0.2
富士地域	374	0.5	3.2	2.1	83.4	0.3	1.1	5.9	-	0.5	1.3	2.9	-	0.3
夏	597	4.5	3.9	1.1	80.6	1.2	3.9	5.7	-	0.5	4.2	0.7	0.2	0.2
秋	537	2.4	2.4	1.1	86.8	1.3	1.7	4.5	-	0.4	3.0	0.7	0.4	-
冬	480	1.0	1.5	1.7	82.1	2.3	10.4	34.0	-	0.2	0.6	1.3	1.9	1.0
平均	1988	2.4	2.8	1.5	78.3	1.4	4.2	12.2	0.0	0.4	2.5	1.3	0.7	0.4
駿河地域	792	3.1	4.7	0.3	86.8	1.2	1.9	2.6	0.1	-	2.0	0.9	0.1	0.5
夏	791	7.7	8.6	0.6	79.1	1.0	5.2	3.5	-	0.9	2.9	4.5	2.4	0.4
秋	795	5.2	4.8	1.0	65.5	0.9	4.3	15.6	-	-	1.1	1.7	1.8	0.4
冬	748	7.6	7.4	1.2	79.1	1.5	4.6	5.2	-	0.1	2.0	2.1	0.3	0.4
平均	3096	5.9	6.2	0.8	76.1	1.1	4.1	7.6	0.0	0.1	1.9	2.3	1.2	0.4
西伊豆地域	396	8.0	5.3	-	76.9	3.3	0.6	2.6	-	-	8.8	0.5	-	1.3
夏	600	3.7	7.3	-	85.5	1.5	1.7	0.3	-	0.2	4.0	3.1	0.7	0.7
秋	399	6.8	10.5	1.8	76.2	2.3	0.8	3.5	0.5	-	4.0	2.0	1.3	0.3
冬	399	1.3	3.8	0.3	74.9	0.3	0.3	16.3	-	-	3.0	1.0	-	0.3
平均	1796	5.5	5.1	0.4	79.2	1.8	0.9	5.6	0.1	0.1	4.8	1.9	0.3	0.6
富士川地域	387	20.7	35.4	26.2	39.5	0.3	17.1	13.4	-	-	1.8	1.3	1.8	-
夏	400	15.5	27.3	35.1	51.8	0.8	3.5	8.3	0.3	0.3	1.3	0.5	-	0.3
秋	378	15.6	25.7	27.0	51.9	-	5.3	16.7	-	-	4.5	-	-	-
冬	105	25.7	16.2	36.2	61.0	-	21.9	-	-	-	2.9	-	-	-
平均	1270	18.0	28.3	31.1	48.8	0.3	11.6	11.7	0.1	0.1	2.5	0.6	0.6	0.1
中東遠地域	318	6.0	11.3	2.3	72.1	-	3.3	5.0	-	0.3	0.3	1.3	3.0	0.3
夏	400	6.3	6.3	0.8	78.0	1.0	2.0	3.8	-	-	0.3	1.8	1.3	-
秋	297	2.5	9.6	0.8	63.7	0.3	5.0	16.9	-	0.3	0.3	2.8	2.0	0.3
冬	395	5.5	8.6	0.8	72.4	0.8	3.0	13.2	-	0.8	-	1.2	1.8	-
平均	1590	4.0	9.4	1.1	71.6	0.5	3.3	9.7	0.0	0.3	0.2	1.8	2.0	0.1
北遠地域	296	2.7	2.7	0.3	92.2	-	0.3	0.3	-	-	2.4	1.0	0.7	0.3
夏	266	10.2	41.4	3.8	48.9	4.9	-	3.4	-	0.4	4.9	0.4	-	-
秋	366	2.5	3.3	0.5	82.5	0.3	1.4	1.4	-	-	5.3	1.6	1.1	0.3
冬	180	2.6	1.7	0.6	82.2	1.7	0.6	-	-	0.6	7.2	0.6	2.8	-
平均	1108	4.4	12.0	1.3	77.6	1.5	0.6	1.4	0.6	0.2	6.0	1.0	1.0	0.2
西遠地域	1151	7.0	8.7	0.7	66.5	2.9	4.4	9.1	0.4	0.3	2.1	3.3	0.3	0.4
夏	1136	13.2	8.3	0.8	71.5	2.8	6.1	2.9	0.4	0.6	1.1	1.6	0.5	0.2
秋	1259	8.7	14.3	1.7	45.4	2.0	3.8	22.5	0.2	0.4	1.0	2.5	0.8	0.2
冬	990	10.7	5.7	1.1	59.2	3.4	7.0	19.7	0.1	0.1	1.8	3.5	0.9	0.1
平均	4536	10.0	9.5	1.1	61.0	2.7	6.0	15.0	0.3	0.4	1.5	2.7	0.6	0.3

(注) 出典：静岡県観光流動実態調査報告書（平成7年度）

3.観光産業の現況

●私鉄年間乗客数の推移（定期券を除く）

区分 年	伊豆箱根鉄道		伊豆急行	
	総数	指数	総数	指数
平成4年	7,053,064人	100.0	4,797,755人	100.0
平成5年	6,832,319	96.9	4,250,954	88.6
平成6年	6,651,193	94.3	4,180,032	87.1
平成7年	6,494,306	92.1	3,795,866	79.1

（注）出典：「伊豆半島と富士山周辺－県税から見た伊豆・富士の行楽客の動向」各年版

●JR主要駅年間乗客数（定期券を除く）

区分			平成5年度	平成6年度	増減
総数			27,412人	25,652人	▲1,760人
東海道線	熱海駅	新幹線	2,201	2,125	▲76
		東海道線	7,267	5,995	▲1,272
	三島駅	新幹線	3,421	3,389	▲32
		東海道線	2,910	2,791	▲119
	沼津駅		4,197	4,119	▲78
	富士駅	新幹線	1,363	1,373	▲10
東海道線		1,489	1,463	▲26	
伊東線	伊東駅		3,132	2,994	▲138
御殿場線	御殿場駅		962	946	▲16
身延線	富士宮駅		470	457	▲13

（注）出典：同上 平成6・7年版

●船舶乗船人員等の推移

区分		平成4年	平成5年	平成6年	平成7年	H7/H4	
総数		984,577	849,666	873,226	742,943	75.5	
大島航路	熱海港	211,795	182,627	167,074	135,081	63.8	
	伊東港	50,100	37,822	37,005	34,214	68.3	
	稲取港	40,563	38,869	35,647	25,799	63.6	
初島航路	熱海港	174,642	167,268	189,618	190,657	109.2	
	伊東港	20,125	16,674	21,882	21,139	105.0	
沼津－松崎航路	沼津港	111,510	89,622	92,185	71,862	64.4	
	戸田港	29,333	25,308	23,346	18,024	61.4	
	土肥港	41,577	35,592	33,262	24,346	58.6	
	松崎港	16,063	13,625	15,500	10,977	68.3	
三津航路	三津港	24,707	17,926	20,515	13,573	54.9	
	沼津港	34,746	25,724	25,412	16,295	46.9	
清水航路	松崎港	1,165	543	981	1,754	150.6	
神津島航路	熱海港	6,917	6,693	5,656	運休	－	
	下田港	10,659	9,848	9,561	10,660	100.0	
新島航路	熱海港	5,528	5,767	5,269	運休	－	
駿河湾カーフェリー	土肥発	乗車券	87,243	74,248	78,361	67,685	77.6
		車両	21,919	18,459	20,404	17,847	81.4
	戸頭発	乗車券	76,914	66,843	73,936	67,402	87.6
		車両	19,071	16,208	17,612	15,628	81.9

（注）・出典：同上 各年版
 ・「総数」の数値は、駿河湾カーフェリーの車両台数（運転者1名）を含む。
 ・駿河湾カーフェリーの乗船人員は乗車券購入客を上段に示し、これには下段車両の運転者1名分を含まない。

3. 飲食・土産品

観光客を主たる顧客とする飲食・土産品販売業の動向を端的に知るための統計データはないが、商業統計の一般飲食業に関するデータをとってみると、東部地域における商店数は昭和57年から平成4年の間に1,170軒が減少し、18.4%の減少率となっている。これに対して従業者数及び年間販売金額はそれぞれ19.6%、53.1%の増加をみせている。規模別にみると、従業員1～2人の飲食店の減少が著しく、10人以上の飲食店は軒数、従業員数、年間販売額ともに増加しており、外食産業の進展などによる飲食店の淘汰・大型化が進んでいる。

これら飲食店の経営動向について、前記の「伊豆地域観光活性化方策調査」の中の観光業界アンケートによると、熱海市、伊豆湯河原温泉、下田市、修善寺で「横ばい」、他は（10件）「下降気味」としており、宿泊施設業に比較して横ばいへの回答が多くなっている。このことは上記の年間販売額の推移からもある程度うかがえるが、「地元住民相手の商売」という回答にみられるように、飲食業の性格上観光客への依存度が比較的少ないということが言える。

下降要因としては、「観光客の減少」（5件）及び「個性不足」（3件）を挙げる回答が多くなっているが、「地元素材を十分に生かしている店」や「名物料理の研究・宣伝を実施している店」は経営は順調との指摘がなされている。

これに対して、土産品販売業については、東伊豆町が「横ばい」である他は全て（12件）「下降気味」としており、その要因としては、「観光客の減少」（11件）次いで「商品の個性不足」（5件）となっている。土産品販売業は、飲食店と異なり観光客への依存度が大きい業種であり、入込みの動向に大きく左右される。

いずれにしても、飲食や土産物は観光の楽しみや魅力の大きな要素を占めるものであり、アンケートの結果にもみられるように、その土地の素材を生かした名物料理やその土地ならではの土産品の開発、あるいは雰囲気のある店舗づくりなど、それ自身が魅力ある観光地づくりにつながるような取組みが求められている。

●一般飲食店の動向（県行政センター管内別）

(1) 商店数

(単位：軒)

地域名	S 5 7	S 6 1	H 1	H 4	増減率(H4/S57)
伊豆地域	646	581	578	580	▲10.2
熱海地域	1,018	956	896	907	▲10.9
東部地域	3,198	2,714	2,668	2,480	▲22.5
富士地域	1,492	1,292	1,236	1,217	▲18.4
小計	6,354	5,543	5,378	5,184	▲18.4
全県計	16,128	14,177	13,591	13,163	▲18.4

(商業統計調査(一般飲食))

(2) 従業者数

(単位：人)

地域名	S 5 7	S 6 1	H 1	H 4	増減率(H4/S57)
伊豆地域	1,772	1,686	1,843	1,939	9.4
熱海地域	3,112	3,330	3,608	3,703	16.0
東部地域	10,831	11,025	12,572	13,111	21.1
富士地域	4,683	4,404	5,192	5,649	20.6
小計	20,398	20,445	23,215	24,402	19.6
全県計	50,991	51,309	58,196	61,721	21.0

(商業統計調査(一般飲食))

(3) 年間販売額

(単位：万円)

地域名	S 5 7	S 6 1	H 1	H 4	増減率(H4/S57)
伊豆地域	725,608	770,756	868,599	1,174,925	61.9
熱海地域	1,408,958	1,688,955	1,954,774	2,336,456	65.8
東部地域	5,209,639	5,812,765	6,845,440	7,756,495	48.9
富士地域	1,814,428	1,927,080	2,355,188	2,756,534	51.9
小計	9,158,633	10,199,556	12,024,001	14,024,410	53.1
全県計	22,379,000	24,948,860	29,089,979	34,254,508	53.1

(商業統計調査(一般飲食))

3. 観光産業の現況

④観光レジャー施設

4. 観光レジャー施設

昭和30年代の高度経済成長期にかけて観光地として飛躍的に発展してきた伊豆地域は早くから大手外部資本による観光開発が進み、比較的大規模な観光施設の整備が行われてきた。その後も、豊富な温泉や自然の景勝地を生かした観光レジャー施設が次々とつくられ、最近では、休憩利用を主体とする自治体の温泉入浴施設なども整備され、新たな観光拠点として人を集めている。

富士山周辺については、伊豆地域に比較して密度は低いものの、富士山の自然や雄大なロケーションを生かした大型の遊園地やスポーツ・レクリエーション施設が立地し、観光客入込数の増加をもたらしている。

伊豆及び富士地域の主要な観光施設（平成6年度観光客入込客統計の調査対象施設）は別表のとおりであり、数では静岡県全体の約55%を占めており、圧倒的な集積を誇っている。

しかし、特に伊豆地域の観光施設は早い時期に整備されてきたため、団体観光用の施設や既に新規性を失っているものが多いこと、さらに「参加・体験型」の施設が比較的少ないなど、現在の観光ニーズに必ずしも対応していないことが指摘され、東京ディズニーランドをはじめ周辺地域におけるテーマパークや体験型観光施設の整備が進む中で優位性を失いつつある。

前記の観光業界アンケートにおいても、大仁町が「順調」、修善寺が「横這い」である他（8件）は「下降」と回答している。下降要因としては「観光客の減少」（6件）が最も多い回答となっているが、観光施設の魅力の低下と観光客の減少とは相互に原因・結果の関係に立っており、なによりも観光ニーズを捉えた魅力ある観光施設づくりが必要となっている。

アンケートの回答でも、「2時間位ゆっくり見学できる施設」や「ふれあえる施設」は順調との指摘もあり、家族や小グループで訪れた人々がゆったりと過ごせるような施設や、参加・体験・学習・交流などの要素を備えた観光施設へのリニューアルが求められている。

●県東部地域の主要観光施設

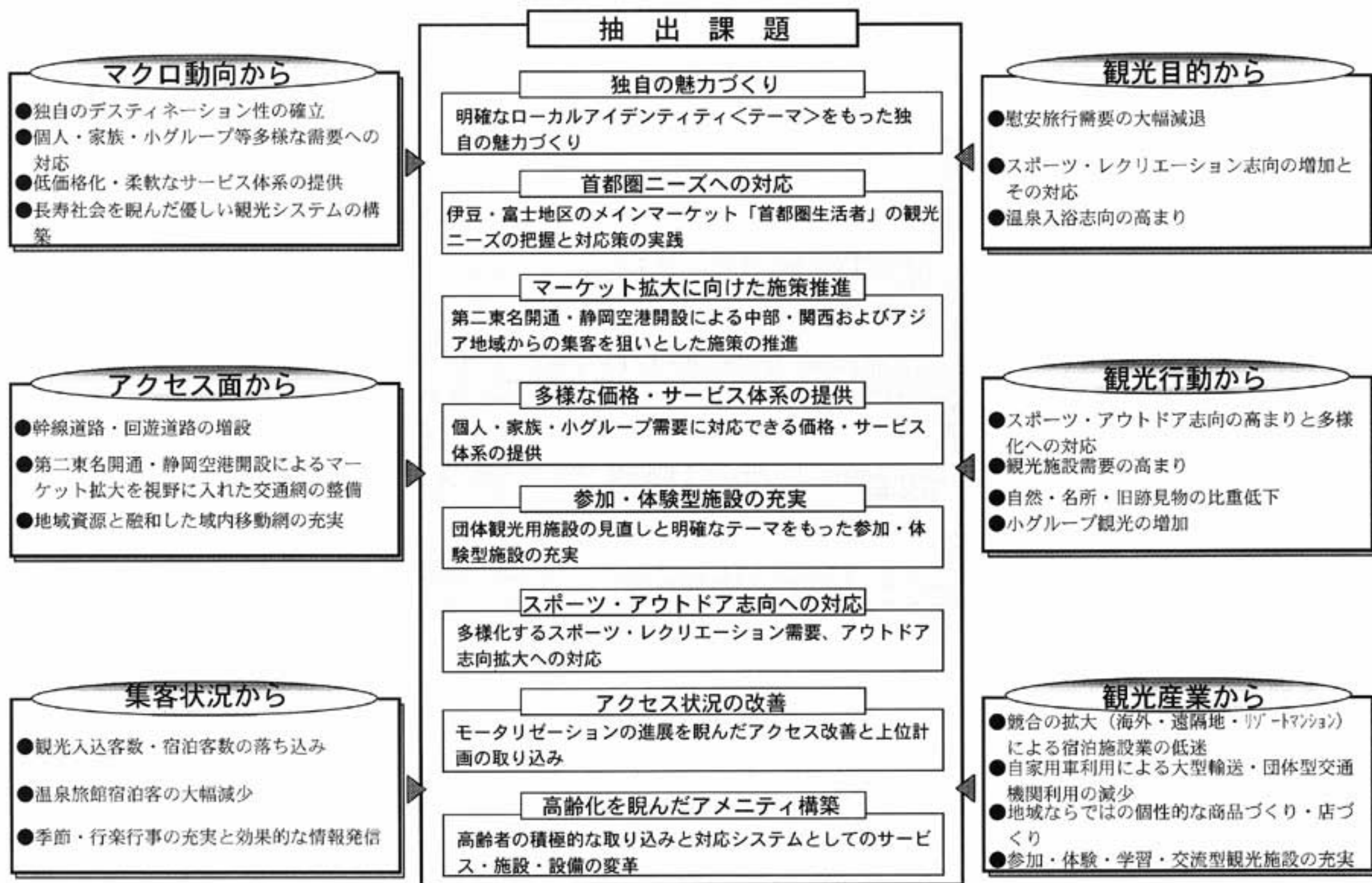
1. 観音型観光施設（77施設）

区分	市町村	施設名	区分	市町村	施設名		
博物館等（18）	沼津市	石山牧水記念館	伊豆市	バイオパーク			
	熱海市	浮田政道記念館		西伊豆町	熱川バナナワニ園		
	伊豆市	中山昌平記念館		西伊豆町	ジャングルパーク		
	下田市	人形館せいのゆ		西伊豆町	下賀茂熱帯植物園		
	松崎町	江戸下田郷土資料館		天城郡・島町	らんのみ		
		長八記念館			いのしし村		
		明治商家中薬庫		中伊豆町	天城グリーンガーデン		
		笠置くじら館		富士宮市	天城高原ベゴニアガーデン		
	伊豆村	造船郷土資料博物館		富士宮市	富士園遊花園		
	土肥町	金山資料館		御殿場市	御船内遊園地		
		家牙美術文庫		御殿場市	富士サファリパーク		
	妻山町	郷土資料館		長泉町	富士竹類植物園		
		福徳の家		木原町等（3）	三津シーパラダイス		
	天城郡・島町	昭和の森の会館		下田市	下田海中水産館		
	富士宮市	奇石博物館		河津町	伊豆アンディランド		
	富士市	市立博物館		産業観光施設等（7）	大仁町	汗らんパーク	
	御殿場市	スポーツカー博物館			富士宮市	稲化成（旧東洋糖業）	
	御殿場市	富士山資料館			御殿場市	富士青峰閣	
	MOMA美術館	小山町	パルク・パルク（御殿場工場）				
三島市	サンクランド美術館		東富士園遊センター				
伊豆市	松野美術館		富士スビードウェイ				
	鶴田20世紀美術館		富士遊園				
	伊豆高原美術館	神社・仏閣等（1）	富士宮市	成田大社			
	メルヘンの森美術館	城山・史跡・墓園等（3）	三島市	東寿園			
	伊豆ガラスと工芸美術館	土肥町	天志金蔵				
	ブーベンハウススタジオ	河津町	辰野邸				
	伊豆一帯陶美術館	自然公園等（16）	伊豆市	城ヶ崎海岸等			
	747・747-1000		南伊豆町	城崎崎元			
	上原弘教美術館			石廊崎			
下田市	長八美術館		賀茂村	貴金崎公園			
松崎町	富士美術館		天城郡・島町	西天城公園			
富士宮市	富士美術館		御殿場市	伊豆の森			
御殿場市	フェラーリ美術館		富士宮市	白糸の滝			
長泉町	ベネッセ美術館		御殿場市	御門風穴			
沼津市	浜島島マリンパーク		その他著名所（9）	沼津市	スカンプナビア		
熱海市	初島バケーションランド			熱海市	稲室館		
伊豆市	シャボン公園			熱海市	熱海城		
	くらんぼる公園			松崎町	百文岩科学校		
	ベゴニアガーデン						
	伊豆グリーンパーク						

2. 行動・体験型観光施設（58施設）

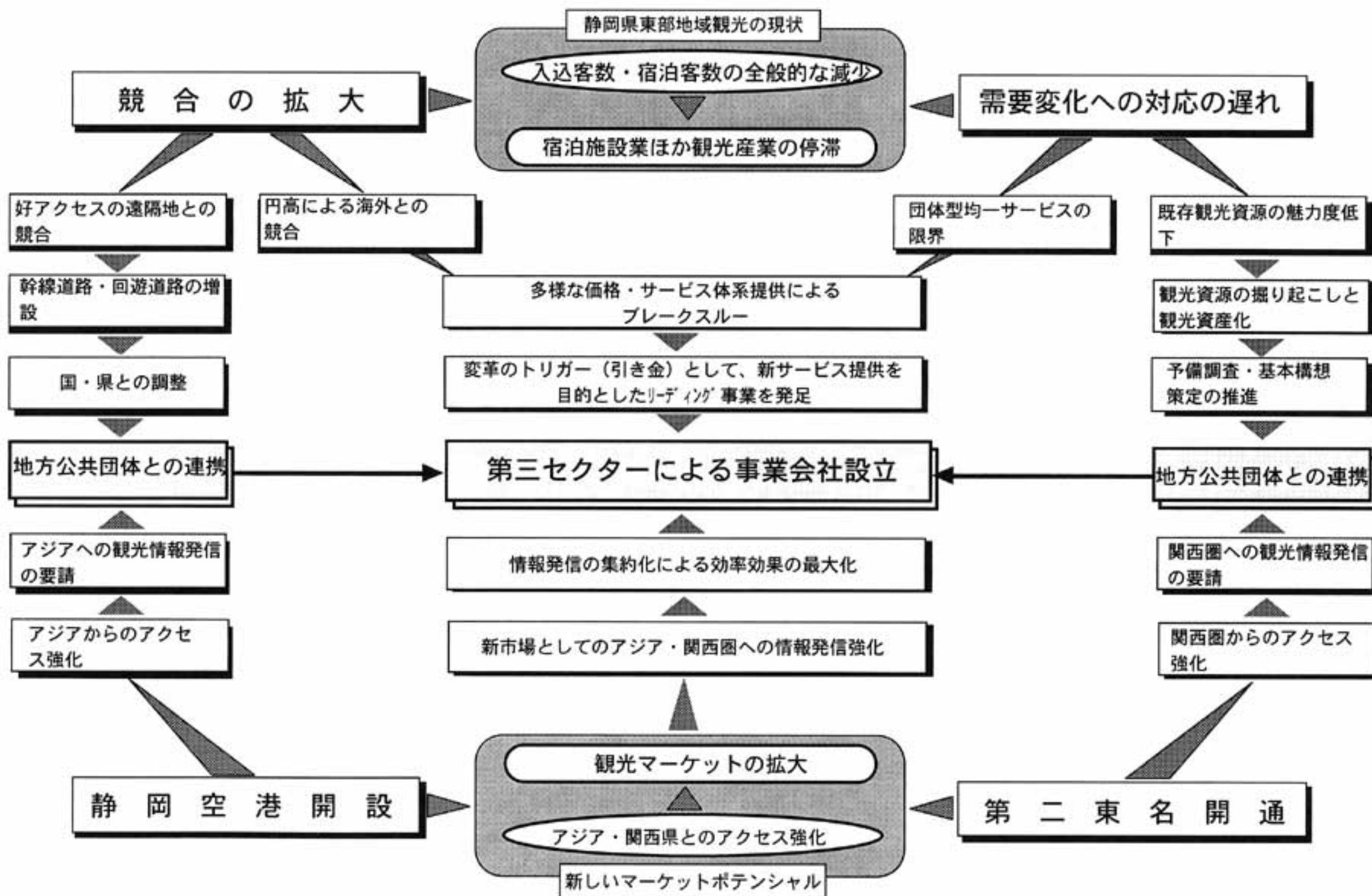
区分	市町村	施設名	区分	市町村	施設名		
公園（11）	沼津市	沼津緑地公園	御殿場市	花鳥山園			
	熱海市	海の牧公園		小田島ファミリーランド			
	三島市	山中城跡公園		御殿場市	日本ランドHOW遊園地		
	伊豆市	さくらのみ		観光公園・商業・牧場（6）	沼津市	長浜つり漁センター	
		海濱公園			南伊豆町	成泉園	
	修善寺町	修善寺虹の郷				一乗竹の子村	
	沼津市	緑川公園			伊豆長岡町	大宮園遊	
	富士市	皆瀬公園			富士宮市	まかいの牧場	
		岩本山公園			御殿場市	忠ちゃん牧場	
	御殿場市	平和公園		公的遊園施設（12）	河津町	サンシップ今井浜	
	御殿場市	中央公園			南伊豆町	瀬り子温泉会館	
スポーツ・レクリエーション施設（12）	沼津市	厚生年金体験センター	西伊豆町		みなと島		
	伊豆市	ルネッサ（伊豆・熱・緑）	西伊豆町		衣田露天風呂		
	南伊豆町	ルネッサ（熱帯高原）	伊豆長岡		日帰り入浴施設（熱・緑）		
	伊豆長岡	スポーツワールド	戸田村		温泉宿湯島の湯		
	修善寺町	サイクルスポーツセンター	妻山町		めおと島の館		
		遠藤山レストハウス	天城郡・島町		島の国公園		
		ラフォーレ修善寺	御殿場市		稲室会館		
	中伊豆町	天城高原ファミリーパーク			乙女の島		
	富士宮市	御修善寺活動センター	芝川町		せせらぎ荘		
		D1スカイジム	リフト・ケーブルカー・ロープウェイ等（7）		伊豆市	ユー・トリオ	
		S.E.T.御修善寺		伊豆市	小室山リフト		
		鶴立山の村		下田市	大室山観光リフト		
御殿場市	日本ランドHOWスキー場			下田ロープウェイ			
レジャーランド（9）	熱海市	成瀬園遊園地		西伊豆町	伊豆島マリン		
	西伊豆町	ビアドーム天志		伊豆長岡町	つらぎ山パノラマパーク		
	南伊豆町	富士前線ランド		河津町	十国峠ケーブルカー		
	三島市	富士見ランド					
	富士宮市	御修善寺グリーンパーク					
		ドライブインもちや					

4.課題の整理

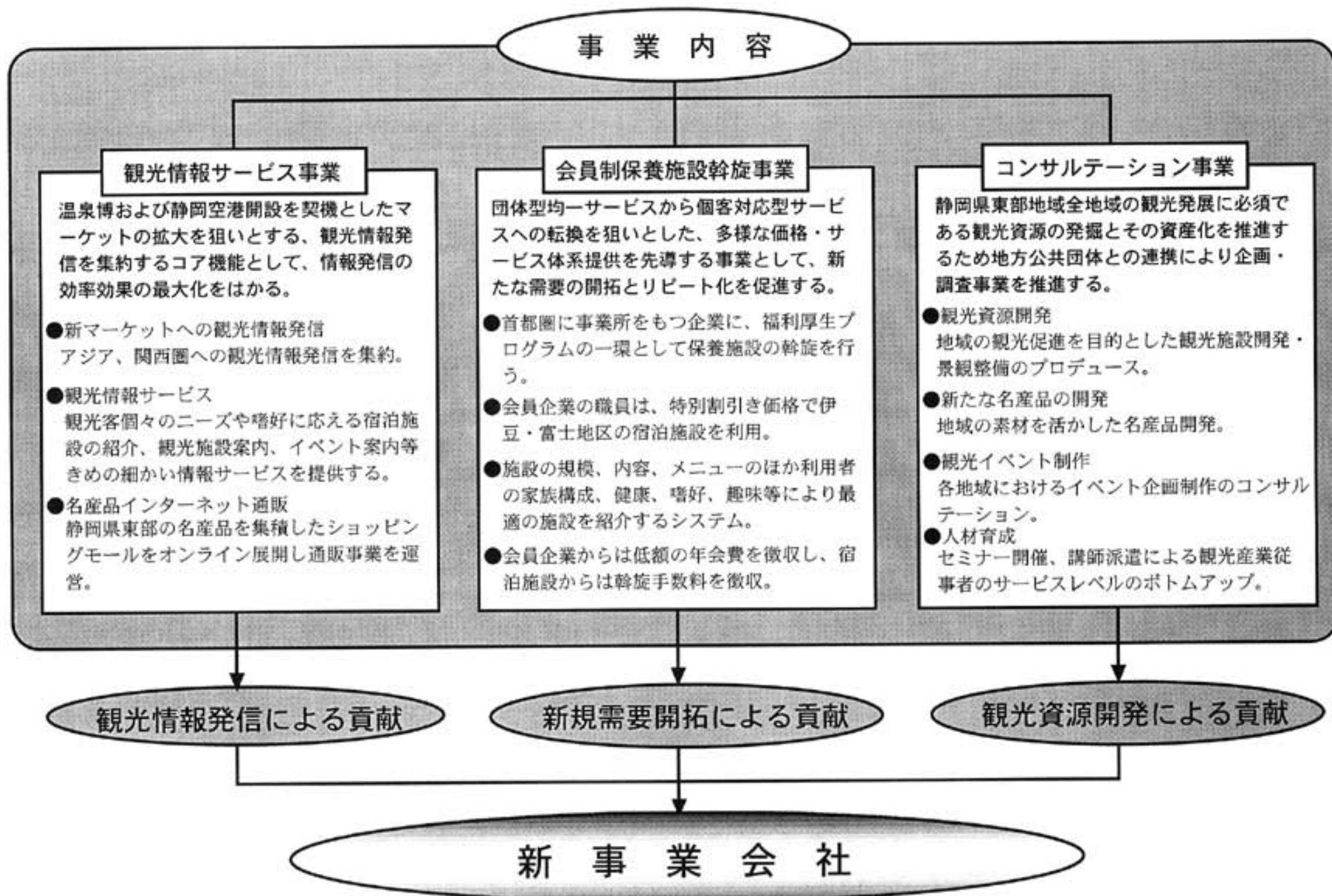


3.課題解決へのアプローチ

1.課題解決へのアプローチ



2.事業フレーム



3. 企業理念とステップアップシナリオ

静岡県観光活性化センター（仮称）

企業理念

- 静岡県東部地域の観光客・潜在客へのサービスおよび情報の提供による便益向上を推進し、新たな需要の開拓とリピーターの育成を通じて静岡県東部地域の観光産業の発展に寄与する。
- 観光資源の発掘およびその資産化を通じて静岡県東部地域観光の個性ある魅力づくりに貢献する。
- 効率・効果の高い観光情報発信を実現し、アジア地域、中部・関西地域をはじめとする、観光マーケットの拡大をはかる。

事業展開のステップアップシナリオ

観光情報サービス事業

1998

温泉博における観光情報発信の集約事業

2005

静岡空港開設・第二東名開通を契機としたアジア、中部・関西地域への観光情報発信の集約事業

2010

静岡県観光情報発信のコア機能へ

会員制保養施設幹旋事業

首都圏内企業を対象とした事業展開

第二東名開通を契機とした中部・関西地域への事業拡大

全国展開へ

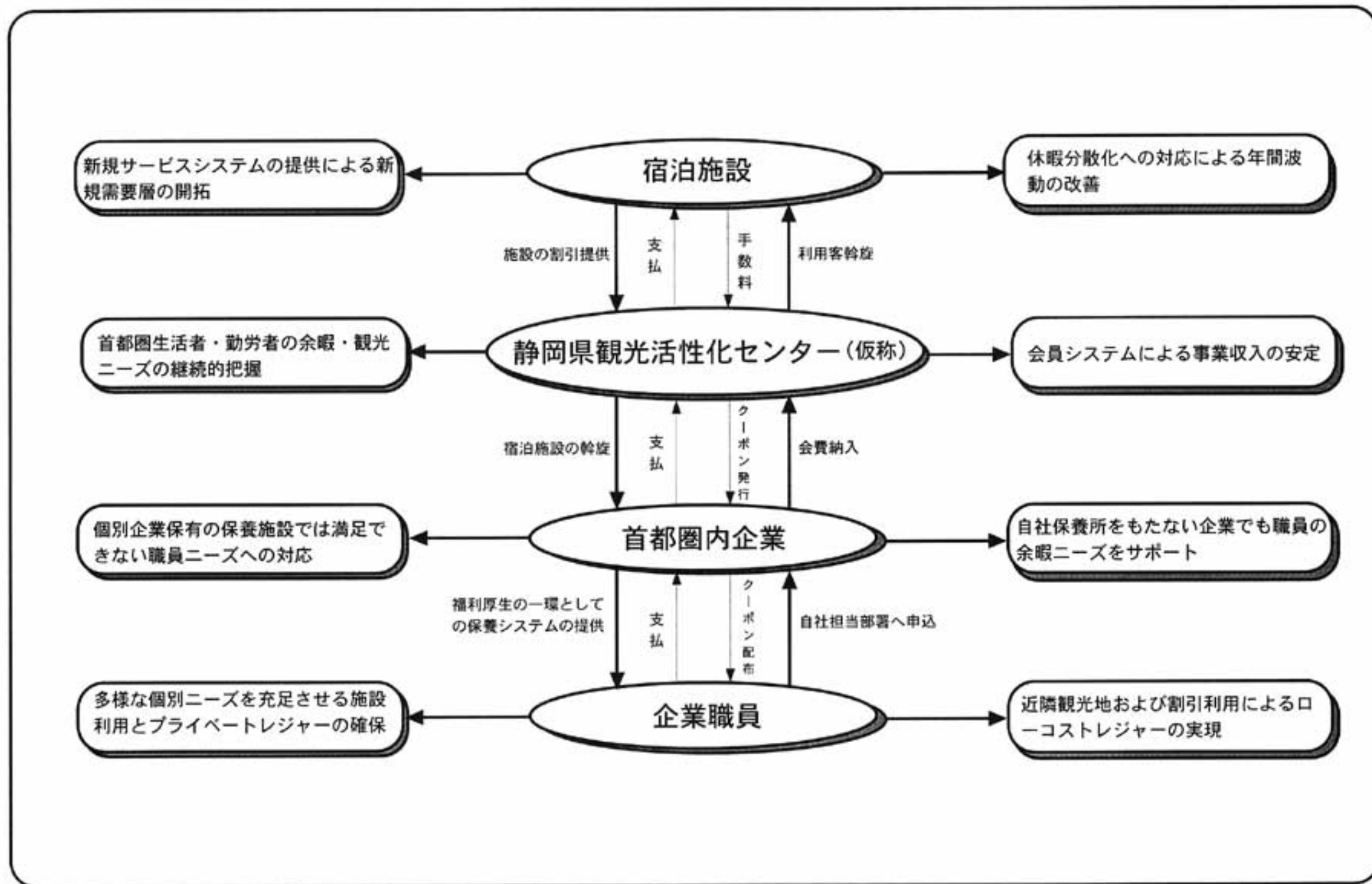
コンサルテーション事業

地方公共団体からの企画調査委託業務を基軸に展開

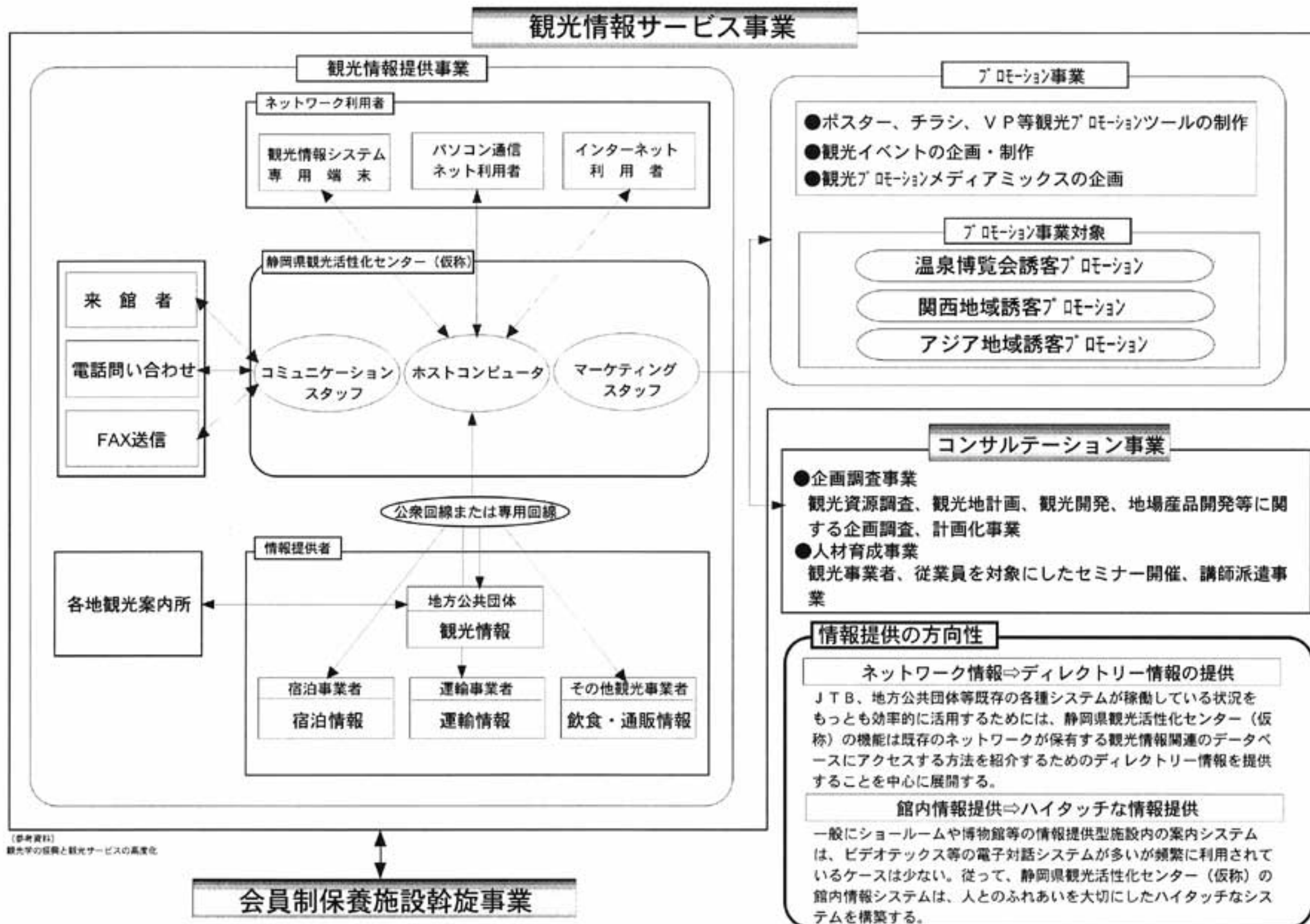
委託事業の発展および自主調査事業の推進によるスペシャリティの強化

国内屈指の観光シンクタンクとしての機能・ステータスの確立へ

4.新規事業〈会員制保養施設斡旋事業〉イメージ

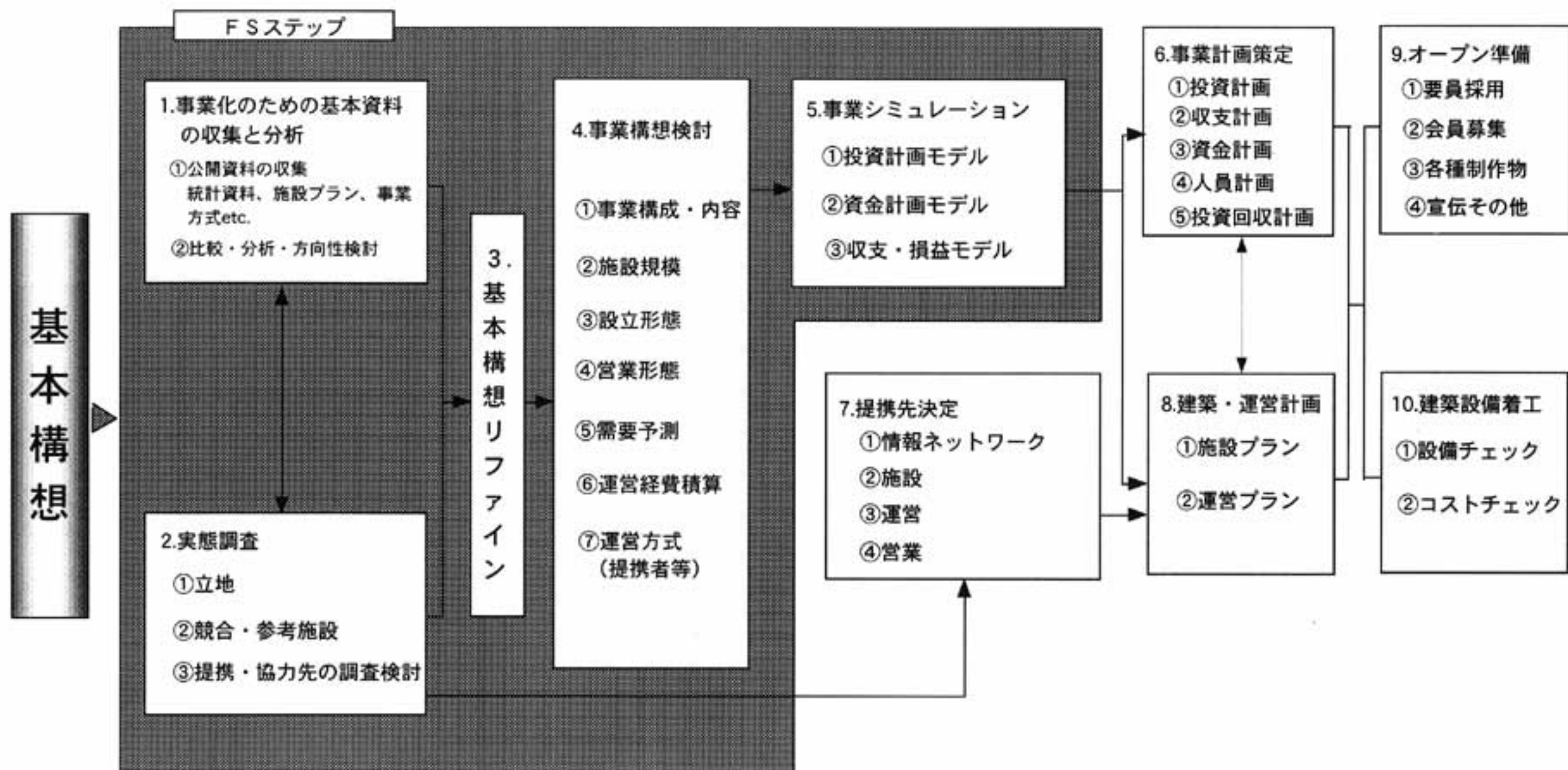


5.観光情報サービス事業イメージ



4.事業化推進のステップと作業の進め方

1. 事業化推進のステップと作業の進め方



1997年1月

1998年7月

FSステップ (方向方針決定まで) = 6カ月

第2ステップ=6カ月

第3ステップ=6カ月

2. フィージビリティスタディのステップ

